

私の

## ニホンゴ習得法

新年  
特集

テレビで活躍する外国人タレントや、取材に答える外国人力士の日本語のうまさには驚かされます。こうした「達人」たちに日本語習得のコツを聞きました。英語学習に生かせそうな内容もありました。

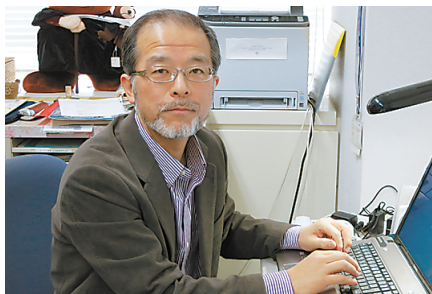
宮崎里司さん  
早稲田大学大学院教授

## ●「相撲部屋には、語学習得の王道がある」

2 外国語を自在に操る「バイリンガル」になることができるのは12歳まで、とされている。しかし、外国人力士は大人になってから初めて日本語に接する場合がほとんど。「日本語教室」に通わずして、不自由のないレベルまで習得できるのは「環境」「動機」「工夫」という、語学に不可欠な三つの要素を満たしているからだ。

相撲部屋に入門した力士は、大部屋での集団生活を始める。外国人も一緒に、通訳なんていない。稽古場はもちろん、朝起きてから夜寝るまで日本語しか聞こえてこない。番付表で自分の名前を探すにも漢字が読めなければいけない。常に日本語漬けの「環境」が1番目のポイントだ。

2番目の「動機」はなんととっても



宮崎教授＝東京都新宿区

撮影：山西厚

出世だろう。十両に上がるまではつらい大部屋生活が続く。相撲が強くなり、出世をするためには、親方が話す言葉を理解しなくてはいけない。ファンやタニマチ（後援者）にかわいがってもらうためには、敬語も話せなくてはいけない。学習意欲の根底には、強いハングリー精神がある。

3番目の「工夫」のひとつに「辞書や教科書に頼らないこと」を挙げたい。

相撲界には「ごっちゃんです」や「えびすこ（大食い）」など、そもそも教科書に載っていない言葉が多い。先輩やおかみさんといった人たちに聞きながら語彙（ごい）や表現を学び、実際の会話で使って身につける。教科書に書いてあることを順番になぞっていくことが多い日本の学校英語とは異なる。

私が調査した力士たちが、自分の日本語能力を自己分析していたことが印象に残っている。エストニア出身の把瑠都は「出世したら敬語の勉強ができなくなった」と話していた。稽古場では後輩に胸を貸す立場となり、風呂やちゃんこも優先され、世話を受ける側になったためだという。そこで1人で近所の銭湯に行き、高齢者と語らうことで敬語を話す機会を作っていた。

学生のように試験などで教師から評

宮崎里司（みやざき・さとし）

応用言語学博士。早稲田大学大学院日本語教育研究科で言語習得などを研究。外国人看護師や介護ヘルパーの日本語教育のほか、東京都墨田区と連携して夜間中学校で外国人の日本語習得を支援している。著書に『外国人力士はなぜ日本語がうまいのか』（明治書院）ほか。

価される立場でない場合は、自己分析がとても大切だ。

私たちが外国語を学ぶ場合、インターネットや様々な教材を活用することで外国語にひたることはある程度、可能になった。上達しないと悩んでいるのなら、まずはその言語を学ぶ目的、動機を再確認したい。そして、教科書をうのみにするのではなく、学んだ知識を実際に身につけていくための工夫ができていのかどうかを振り返ってみてはどうか。

（聞き手・山西厚）